

史上初。唯一無二の祭り

エイサー、ハーリー、旗頭をはじめ、沖縄が世界に誇る多様な伝統文化。そこに「海人のまち糸満」を象徴する県内各地の水産業と魚食が重なり合った、「ぜんぶ祭り2025」が糸満市で開催されました。

「史上初。唯一無二の祭り」を掲げる本イベント。その誕生の裏側と主催者の思いを聞きました。

伝統

「ぜんぶ」を「1つ」に

金城立磨さん(以下、金城)

私は旗頭に長く関わっていて「旗頭こそ一番かっこいい」と思っていました。そのような中で石垣のハーリーや沖縄市のエイサーに触れて、「もし旗頭と他の伝統芸能を一緒に披露できたら、とても魅力的な祭りになるんじゃないか」と考え、大浜に声をかけたことが祭り開催の出发点です。

大浜公さん(以下、大浜)

金城から声をかけられ、すぐに沖縄爬龍舟フェスティバルの主催者のもとを訪ね、一緒に取り組みないか交渉をしました。

金城 当初は「伝統芸能を一堂に集める」という二本のコンセプトでした。

漁師飯の提供はメインではなかったのですが、多くの人からさまざまな意見を聞く中で、「いのりのまち」で伝統芸能による平和への願い、「海

人のまち」で魚食文化の普及という2つを重ね合わせて進めることになりました。

ゼロからの挑戦

大浜 私も金城も、これまで旗頭やハーリーの出演者であって、イベントを一からつくる立場ではありませんでした。第1回となった昨年は、沖縄爬龍舟フェスティバルの主催者に企画書の書き方から当日の運営方法

金城 演者のエイサー団体や旗頭、漁師飯を提供する漁協には直接声をかけました。さらに沖縄県漁業協同組合連合

まで教えてもらいました。また、同じ会場で開かれていた「糸満ふるさと祭り」の警備体制を参考にしつつ、会場が漁港であることを踏まえて、さらに安全面を強化するなど、試行錯誤しながら自分たちの考えを少しずつ形にしていきました。

会から通知を出していただき、各方面に広く呼びかけました。加えて、関係機関に提出する資料づくりや調整、開催費用をまかなう協賛金集めも大きな課題でした。地元だけでなく、私や大浜が仕事を通じて、つながりのある東京や大阪、名古屋の方々にも協力をお願いし、なんとか開催にこぎつけました。大変なことは多くありましたが、観客が感動し、満足し

大浜 祭りの後には、会場を開催前よりもきれいにしようということ

で、出店した海人や参加団体と一緒に会場の清掃を行いました。また、次回の開催を見据えて、清掃後に交流会も開き、祭りの振り返りや改善点を共有し、次回につなげて、より良い祭りにする取り組みをしています。

未来の「ぜんぶ祭り」

金城 第2回の今回は、沖縄県にも後援いただきました「しまじま芸能祭」との同時開催が実現しました。さまざまな伝統芸能が一堂に集まることで、演者同士の交流も行われています。伝統が息づく糸満の地で平和を祈りながら、沖縄全体の伝統芸能を盛り上げ、次世代の子どもたちに継承していけるように、今後も市と連携

して継続したいです。

大浜 「海人が美味しいと認める料理を、海人自ら提供する」という場は多くありません。離島の料理が本島で味わえる機会も少ないため、この祭りを通して魚食文化の普及に貢献したいです。さらに、魚のつかみ取りや稚魚の放流といった体験企画で水産業に関心を持つ子どもたちが増え、未来の担い手につながるような祭りになっていきたいです。

KEEP PADDLING

ぜんぶ祭り実行委員会
おおはま こう
副委員長 大浜 公さん

公漁丸

ぜんぶ祭りが海人のつながりの場に



八重山漁業協同組合
うえはら ゆういち
上原 有市さん

八重山は糸満から移住した海人が多く、私も糸満がルーツの海人です。八重山と同様に、県内には糸満にルーツを持つ海人が多く、水産業の発展や魚食の普及を目的としたイベントを糸満で行うことは、多くの海人が快く受け入れていると思います。また、「ぜんぶ祭り」のように

県内の海人が一堂に集まることは少なく、私たち離島の海人にとっては横のつながりや交流を深める良いチャンスとなっています。今後も、このイベントを実行委員会の皆さんと一緒に盛り上げて、県内水産業の発展、魚食文化がさらに普及するように取り組んでいきたいです。

ぜんぶ祭り実行委員会
きんじょう りゅうま
委員長 金城 立磨さん